

彼岸に歩む

お彼岸は、日本仏教徒の仏道修行週間です。仏教徒でなくとも、日本人なら誰でも知っているお彼岸には、どこか家庭でも必ず、仏さまを大切にまつり、ご先祖さまの供養をいたします。

私たちが仏さまに、いろいろなお供えをいたします中に、六種の供養と申しまして、六種類のお供えがあります。このお供えをすることが、そのまま六波羅蜜の修行になると教えられています。波羅蜜とは梵語で、漢訳したのが彼岸という言葉です。彼岸の意味は、悩み煩いの多いこの岸から、そうでない住みよい彼岸に渡るといふことで、そのための修行が六つあることから、六波羅蜜と申します。この修行は平素も勿論大切であります。特に春分、秋分の前週一週間を、彼岸と名付けるようになったゆえには、仏教が、右にも左にも片よらない、すべてを超越する、中道を尊ぶ教えです。季節的に暑くない、寒くもない、そして昼夜の長短の別がない、中道の理にかなった、春秋二期の彼岸という、仏道修行週間になったと思われれます。この時期に一層六種の供養をつとめ、ご先祖さまの菩提をお祈りすることは、きわめて大きな意義があります。

六種の供養即ち六波羅蜜の一事についてみますと、
一、布施波羅蜜 ↓ 水 ↓ 一滴の水も広くゆきわたり、よくものを潤おし育てます。与え施すことによって執着の心をなくします。(ほどこし)

二、持戒波羅蜜 ↓ 塗香 ↓ すがすがしい匂いはすべてのものを清めます。規律を守り、自己の欲望に流されぬ心を養います。(おきてを守る)

三、忍辱波羅蜜 ↓ 花 ↓ 美しい花はまろやかに、何もものも許すことが出来ます。あらゆる苦しみに耐える心根をもつ事が出来ます。(耐え忍ぶ)

四、精進波羅蜜 ↓ 香 ↓ お香は一度点火すれば休まず怠らず、身を焦し続けます。怠け心に打ち克ち、仏道修行に励みます。(はげみ)

五、禪定波羅蜜 ↓ 飯食 ↓ ゆたかな食事は身心を落ちつけます。心の安定を保ち続けます。(しずけさ)

六、智慧波羅蜜 ↓ 灯明 ↓ 明るい光は私自身を、また社会をも照らします。物事の真相を見極めます。(仏のまなこ)

このように、お供えいたします一本の線香にも、一灯のお灯明にも、深い意味がこもっています。仮りにこうした意味の理解に乏しくとも、これを身に行うことで尊い供養となり、大きな功德となることに相違ありません。お彼岸中は無論のこと、平素もつとめてこの修行を忘れたくないものでもあります。
南無 大師 遍照 金剛

境内の水掛 不動明王



境内の胎藏界大日如来



加護 (かご)

仏教が生んだ日本語

加護とは仏神が力を加えて護ることをいい、目には見えない仏神の働きを「冥」とするところから、知らず知らずのうちに仏神の加護を蒙ることを冥加といった。「冥加に尽きる」とは、身に冥加を得たときしかいようがない場合の表現である。

空海の言葉 シリーズ

ぶつじつ かげしゅじょう しんすい

仏日の影衆生の心水に現ず

「即身成仏義」

●●● お加持とは、仏と拝む人が以心伝心すること

お加持、正確には「加持祈祷」といいます。真言宗の言葉で「修法」といいます。

弘法さんは盛んに修法されました。雨乞い、病魔退散、当病平癒など修法がことごとく効果を現わしました。成田山、川崎大師、また当山の護摩祈祷も修法の一つです。家内安全、病氣平癒、厄除祈願、合格祈願、良縁成就などさまざまですが、時には驚くべき効果を發揮するのです。

弘法さんはお加持の不思議な力を、こう説明されています。

「仏さまの力を月にたとえ、祈る人の心を水にとえ、月がその姿を水面に映すのを「加」といい、水面が月光を感じるのを「持」という」

祈る人の心が、鏡のように静かな水面ならば、満月はそのまま美しい姿を水面に映します。けれども、祈る人の心が荒海のようなならば、月の光は水面まで届いても、水面は満月を映すことができません。

